

「漂民宇三郎」論

— 開かれた宇三郎／閉ざされた共同体 —

鄭 寶 賢

はじめに

「漂民宇三郎」は昭和二十九年四月から翌年十二月まで、井伏鱒二の五十六歳、五十七歳の時に『群像』に連載され、昭和三十年年度芸術院賞を受賞した記録文学である（注1）。作品のあらすじは次のようである。

天保九年（一八三八）、金六、宇三郎の兄弟は、長者丸という船の乗組に雇われて、松前を出帆、江戸に回航の途中、一行は漂流する。漂流して六ヶ月後、アメリカの捕鯨船に救助され、サイノツ諸島（ハワイ群島）のうち、ウワへ島に運ばれるが、宇三郎の兄金六は漂流中、漂流への責任を感じ投身自殺する。宇三郎は広東人陳祖遠の時計屋で下働きしながら、祖遠の娘愛蓮と恋仲になり、また船中で見つけた二粒の種籾を播く。しかし、帰国を志し、そのため、すべてを捨てて、同僚と一緒にロシア領カムサツカに行き、松前行き便船を待つていた。ところが、そこで宇三郎は同僚金蔵らと対立し、帰国を諦め、宇三郎はハワイに戻ってオイレントと結婚する。一方、金蔵らは天保十四年ロシア船で松前城下へ帰郷するというストーリーである。

この作品について、井伏の弟子を自認する三浦哲郎が傑作であると

称えると井伏はこう語った。

愛読者というものはね、失敗作の方を好むんだって。失敗作の方にその作者の癖や匂いがより濃く出るから。（注2）

井伏は事実「漂民宇三郎」を失敗作と思っていたようで、自選全集（注3）にも収録していない。しかし失敗作にこそ作家の癖や匂いが濃く出ているという井伏の言葉を借りるなら、「漂民宇三郎」こそ井伏文学の本質を研究するに意味があると思われる。

先行研究は、典拠との対比は行なわれているが、虚構部分の意味は十分考察されていないようである。本稿では虚構部分の意味を考察し、「ジョン万次郎漂流記」を書く時の井伏の「漂流譚」（注4）の定義から外れている、漂流ものとしての作品の位置をも追及し、井伏文学の本質を探ってみたい。

一．問題の所在—「異国物語」と宇三郎の創作の評価

「漂民宇三郎」には、「蕃談」、「漂民聞書」、「時規物語」、「異国物語」の、四つの資料を参照していると書かれている。

「漂民聞書」は先行の研究者も未見であるが、「蕃談」と「時規物語」は『日本庶民生活資料集成』第五卷（昭和四十三・九、三一書房）

にある。「蕃談」、「時規物語」、「漂民間書」は幕府や加賀藩の役人が取調べた記録で、帰郷して役人に気がねして書かれ、「時規物語」、「蕃談」には、長者丸の乗組員が初めから十人であったと言つて、宇三郎に関する記録は一切ない。対して「異国物語」は、異国に在り続けた宇三郎の視点から、外地で老人素老が役人に遠慮せず追想した明治十二年脱稿の記録であると性格付けられている。

しかし、宇三郎に関しての唯一の記録である「異国物語」は典拠の真偽が話題になってきた。結論からいうと、「異国物語」は作家の創作であることが昭和五十六年の浦田佑氏の研究により明らかになった（注5）。従つて「異国物語」にしかない宇三郎も虚構の人物である。

その他、昭和六十年の寺横武夫氏と平成四年の松本鶴雄氏が、井伏の父の雅号「素老」を物的証拠として挙げながら、「異国物語」は架空の物語であると記している（注6）。

付け加えられた架空の人物や設定について、一貫して沈黙を守つていた井伏は後になってこう語つた。

『漂民宇三郎』は、「群像」の川島勝が書けというから書いたんだけど、困りながら、なんとか書いた。（中略）

記録文学として書くのに、実際の人間だけだとちよつとまづいので、宇三郎という人間を一人増やした。それでアメリカに残した。空想の人間なんだ。ほかの記録は実際からとつて、船のなかで喧嘩するところもない。（注7）

こういった井伏の創作について、松本氏は失敗に近いと評価を下している。その根拠として次のようなことを上げている。

江後寛士の先ほどの文章にみるように、それ以外の所は稲の話と

ロシアでの歌舞伎の話以外はまったく『時規物語』と同じであるという。これほどまでに同じであつて見れば、「作者は一体何を作り出したのかという疑問」も生じて来るかも知れない。いや、宇三郎像の創出があるではないかと言いたいが、この論者はそんなことは先刻承知しているはずだ。とすれば宇三郎像創出は失敗だったのか。結論を先取りすればそういうことになるかも知れないのである。（中略）ストーリーとモチーフに小さな亀裂があるものの、シロウト目には作品全体にさほどの影響もないようにも見えるが、作者自身の審美眼の方はそれを見逃さず、きびしく、正確であつた。宇三郎は異国の果てに未熟児のように葬られたのである。（注8）

松本氏は結末に進むに従つて、帰国組の漂民の話は扱われているが、宇三郎の話はなくなっており、特に宇三郎が異国生活でなぜ幸せではなかつたかを井伏が引き出せなかつた事に失敗作となつた原因があると記している。

一方、薄田氏は「異国物語」は創作人物を定着させるための創作であつて、宇三郎の創作は記録に小説的生命を付与していると次のように記している。

小説中での「異国物語」からの直接引用箇所は、一章、二章、十六章に各一箇所ずつ、計三箇所あるが、（中略）創作人物宇三郎をゆるぎなく定着させるための創作手法に他ならないと考えられる。（中略）

先に述べたように、「時規物語」はその筆録者に人を得て、この時代の漂流記の記録としては実に得難い貴重な資料であると思

われるが、井伏はそれらの中に宇三郎という創作人物を加えて、この記録に小説的生命と井伏の人間観を付与したのであった。(注9)

これらの論には、宇三郎という虚構人物を設定することで何が語られているのかについての言及は乏しい。老人が役人に遠慮せず追想したという設定の架空書物に描かれている宇三郎の創作には、どのような意味があるのか、その評価も含めて見直したい。

二 宇三郎の初め扱いに現れる交流

「漂流宇三郎」はタイトルからも分かるように、宇三郎中心の物語(注10)として、異文化との交流(注11)を語り、理想的共同体像を提示している。次は全知の語り手が、途中で宇三郎と一体となり、語り手が宇三郎に寄り添っている事が分かる所である。

「おお、初め。俺はこの初めを植える。さうだ、一粒でもよいわい、苗代をつくらう。」

宇三郎は思はず大きな声でさう云つて、そばに寝ころんでゐる八左衛門をびつくりさせた。

「なに、苗代をつくるがやと。宇三、どこへ苗代つくる。」

八左衛門は起きあがつた。

「だが宇三、地面ないぜ。」

ただ、ほんのすこしの土があればよいのである。てんま組に、梅の木の大きな植木鉢がある。水は、いづれ夕立が降つたとき布

ぎれで受けて箱に溜めればよい。(一章 70〜71頁)

宇三郎と八左衛門との会話部分であるが、突然語り手が「ただ、ほんのすこしの土があればよいのである」と語り、宇三郎の心と一体化している。このように宇三郎を主人公として造形した井伏の狙いとは何であったのか、宇三郎の人物像を先ず考察する。

宇三郎の母は、宇三郎が生まれる前に子供がなかつたため、自分の弟金六を養子に迎えた。それで宇三郎は母の弟金六と兄弟となり、共に船乗をした。四十九才と十八才という年の差もあり、金六は宇三郎が「船のなかでも仕事の手が空くと草双紙などを出して読む」等するので、普通の船乗にふさわしくないと不満を持ち、宇三郎を馬鹿にしていた。船乗りとして変わっていた宇三郎は、異国でもメリケン語の字をすぐ覚え異国人達を驚かせたりした。混血児オイレンと恋仲になり、異国人ジョンズとも友達になる。

こういった異文化に開かれた態度の宇三郎は、漂流中船上で見つけた初めを大事に扱い、異国で植え続ける。ところが宇三郎の意識の変化により、初めに託していく意味も変化する。始めは単なる故郷への懐かしい思いを託して積極的に植えていたが、途中で交流を大事にする異国人との出会いで、交流の精神を学び、保守的同僚から仲間外れにされ残留するようになった宇三郎は、交流を初めに託して交配種を植えるようになる。以下初めとの関わりを中心に宇三郎の意識の変化を探る。宇三郎が始め初めを見つけたのは、船上であった。船上では「地面がない」ので初めを植えられないと思う八左衛門と違って、宇三郎は「一粒でもよいわい、苗代をつくらう」と積極的に初めを植えようとする。宇三郎は初めに望郷の念と帰郷願望とを託して植える。また、異国でも

帰郷への願いを込めて宇三郎は籾を植えようとする。

「おぬしが、苗代をつくつたと。」ダーエモンは、はじめて仕事の手を休めた。「この島では、それこそ前代未聞の話ぢやねえ。

おいらは、ムマオイの島にゐたときにも稲田は見ざつた。さうか、苗代をつくつたか。おぬし、どこから籾を手に入れた。」

「漂流のとき船のなかで、玄米に混つてをつたんだぢや。糯米の籾が一粒、粳米の籾が一粒ぢやけれど。二粒の籾で、このウワへの島を、豊葦原瑞穂の国にするつもりぢや。」(6章 115頁)

稲田がない不毛な異国の状況にも関わらず、そのウワへ島を、「豊葦原瑞穂の国」にしようとする。宇三郎の前代未聞の発想に、長くウワへ島に住んできた日本人ダーエモンは驚き、広東人陳祖遠は何十年ぶりに籾を見て懐かしい思いをする。宇三郎は帰郷の準備をしながらも、日本の籾を他国で植える。しかし、苗代づくりには帰郷への願望の意味があつたので、宇三郎は帰郷に向けてカムサツカへ行つてからは、胸をときめかしていたウワへ島の籾の事はしばらく忘れる。

その後、宇三郎はロシヤでロストフに出会い、結局ハワイに残留するようになった時、籾の事に新しい意味を持つようになる。カムサツカへ日本漂流の実見に來た日本語が流暢なロストフは、イルクーツカ日本語学校で日本語を学んだ人だつた。

宇三郎の胸は異様にときめいた。こんな他国で日本語の話せる異人にめぐり遭ふとは、夢にも思ひよらないことであつた。(13章 172頁)

ロストフは一種の国際文化交流として、日本漂流に芝居興行を打たせ、日本とロシヤとの文化を交流させようとする。

ついでには当所に滞在中、日本漂流どもと当所のロシア人との交歓の一助ともするために、日本漂流に芝居興行を打たせたい。芝居の外題は日本漂流の勝手たるべきこと。台詞は、ロシア人にわからなくてはいけないのでロシア語を用ゐること。(13章 176頁)

ロシヤと日本との交流に勤しんでいるロストフは、日本文化と日本語について次のように語る。

ロストフは云つた。日本語とロシア語では言葉の骨組が全く異なるが、一応のこつを呑みこむと、ロシア人でも日本語を喋るのは割合に容易である。しかし日本の文章をロシアの文章になほすのは大変に難しい。またロシアの文章を日本文になほすのも難しい。これは日本の平仮名や漢字も読みにくい、日本文には一種特別の綾があつて一番それが難解なのである。(14章 182頁、傍点本文)

日本漂流をロシア人と結婚させ、ロシアに定着させようとするロストフがいう、「一種特別の綾」には、日本文化がなかなか異文化と交われない閉鎖的性格を持つていたといった含蓄があるように思われる。日本語を習うと話せるようになるはずなのに、日本文には綾があつて翻訳しにくいとロストフはいう。日本語の疎通の時、お互いに特別な綾を求める。それは人情の機微や状況など特殊な文化固有の掟であろう。それが理解できず、話すと異人扱いされるのである。宇三郎は同僚が大事にしてきた村の掟に乘らないで自由に行動し、それにより裏切りものとして扱われるようになったのである。井伏は共同体の閉鎖性をロストフを通して語っている。ロストフからこの言葉を聞い

た宇三郎は、言葉が同じ日本人であっても心が通じず、宇三郎を異人扱いしていた同僚の事を思い出すのではなからうか。宇三郎は、開かれた心の持ち主で物分りがよく、日本語も話せるロストフに出会い、心が通じた事により、新しい思考を持つようになる。同僚とのぶつかり合いで寂しい思いをし、疲れ果てていた宇三郎は、帰郷への執着を捨て、異国に残る決心をし、ウワへ島での初めの事をも高く評価してくれたロストフに残留する事を相談する。宇三郎は彼から国際交流の心を学ぶ、それが初めの扱いの変化に現れている。

宇三郎は、異国に残り、ウワへ島からムマオイ島へ移住しているオイレンに附いて行き、そこで結婚して定着する。カントンマン一家はムマオイ島に稲田を作っていた。また元祖である日本種から広東方面の種に変えながら田植えは続けられた。初種が変わったのは、ウワへ島で帰郷を準備しながら、日本人としてのアイデンティティから離れなかつた宇三郎が、徐々にカムサツカで同僚とのぶつかり合いにより、故郷の保守的アイデンティティと違っていた事が確認できた事に似通っている。

その後、宇三郎は混血児オイレンとの間で子どもを得た事から思いつきを得、故郷と異国との交流の精神から、広東米と日本米との交配種に積極的に挑戦する。宇三郎の初めの交配種を作る試みは、ロストフにあった国際交流精神に繋がる。初めの交配は失敗に終るのであったが、宇三郎はオイレンと家庭を作り子供を得、彼自身異国の人々や文化と交流して生きていったのである。宇三郎は故郷のアイデンティティから同化も異化もしておらず、交流を願う独特な夢をみる人物となった。井伏は理想的な願いとして交流の意味を架空の物語の初のエピソー

ドに大きく託している。交流の意味として最もはっきりしていた創作、ロシアでの忠臣蔵芝居興行の話は、宇三郎が二粒の初を蒔いて稲を育てる話と通じているのである。以上の考察のように、宇三郎は異文化に開かれた姿勢を持っている開放的な人物として創作されている。当然、こういった宇三郎は、保守的な他の漂流民たちと衝突するようになる。井伏が宇三郎を他の漂流民らの中に入れて衝突させるのは、他の漂流民らの悪い人間性を告発するためというより、村の保守的な考え方と違つて、異文化に開かれていた人間がどう異人扱いされるかという共同体への批判意識からの創作であつたように思える。それを明かにするために、次の項でその衝突の様相を追う。

三、宇三郎と金蔵らの対立

—閉鎖的体制を具現する金蔵ら—

開かれた心を持っていた宇三郎は、異国で異国人と恋愛や友情の関係を形成するが、それが閉鎖的社会的アイデンティティを持ち、異国での奉公運もつけない金蔵らには氣に触る。

次の引用は字が書けない金蔵が太三郎に書いてもらつて、宇三郎に送った抗議の手紙である。そこには悉く閉鎖的な価値観の金蔵らの様子が描かれており、大きく次の三点の抗議がある。一つは、異国人才オイレンとの恋愛への抗議であつた。

お前は鳥籠を持つて歩くのに、大事げにその紐を手首に巻いてゐた。お前はそれでよいかもしれないが、はたの見る目といふこと

をお前は考へない。われわれ長者丸乗組の者は、(中略)一椀の米も水も互に分けあつて露命をつないで来た仲ではないか。それが船乗の作法ではないか。自分ひとりだけの悦楽は許せない。(15章 193頁)

宇三郎はハワイのウワへ島のカントンマンの娘から、前年出港の折、「雲雀の鳥籠」を生き形見にもらつて来たが、その籠をさげる紐は、オイレンの襷か腰紐かで、赤い紐がなまめかしいと抗議する。「はたの見る目」や「自分ひとりだけの悦楽は許せない」というのは、一見団体意識を強調しているように見える。が、それは交友、交流にも抵抗になつてゐる。

二つは、ウワへ島へ遊学に来ていたジョンズとの交友への抗議であつた。宇三郎の異国人との交友は、金蔵らの団体の行動路線に沿つていない常識外の行動であつた。

お前は女色も好むが衆道にも其者それしやであるやうだ。先方のメリケンの若人は、ただ毛色の変つてゐる日本人珍しさのため、お前にかと話しかけたにすぎないのだ。(15章 193頁)

そして第三は、ソーニヤに次郎吉を婿入りさせようと、ロストフに頼まれて口をきいたことに対してである。

いつたいお前のやうな若造が、よその女と男を見て、それを夫婦にしてやらうと思ふのは、おのれに意外な色気があるからぢやと思ひ知るがよい。次郎吉はお前より年上で女房子持だ。ソーニヤとやらは毛色の違つたロシア人だ。ロシア人の血と日本人の血は、相性がよいとお前は次郎吉に云つたさうな。それはお前の余計な色気といふものぢや。(15章 194頁)

次郎吉が奉公していたナチャニカの侍女ソーニヤが次郎吉に懸想していた事を知つたロストフは、これをきっかけに次郎吉をロシアに残そうとする策を立てて宇三郎に次郎吉への使者を頼む。ところが、宇三郎が使者をした事が、金蔵には言い掛かりをつけるいい口実となつて二人が衝突する決定的な事件となる。金蔵らには、異国人との結婚は想像を絶する事であつたからである。これらにより宇三郎は非常に落胆する。

みんなが寄つてたかつて宇三郎を仲間はずれにしてゐるやうに思はれた。これでは日本に帰つても、仲間からどんな悪口を云ひ触らされるかわからない。(15章 194頁)

つまり故郷のアイデンティティを固守しようとする閉鎖的他の漂民たちは、異文化に開放的であつた宇三郎を異人扱いするのである。金蔵らのこゝろといった行動は、帰郷のためであつた。帰郷のために異文化に対して排他的姿勢であつたのは次の箇所でも分かる。

第一曜日に、漂民たちはお寺見物に行くか行かないかといふ話から、二派に分れて口論した。お寺に行つて善男善女のうたふ聖歌を聞きたいと云ふ一派と、たびたびお寺に行けば日本に帰つてから絵巻をさせられるとき気が咎めると云ふ一派に分れ、お互に雨に降りこめられて気が腐つてゐることとて予想外な大喧嘩になつた。宇三郎はお寺見物に行きたいといふ派であつた。(18章 223頁)

帰郷することが一番の関心事であつた漂民たちには、キリスト教会を見物することすら、帰国時の取調べの対象となるのを恐れているのである。金蔵と対立していた宇三郎は改宗し、他の漂民たちも宇三郎

を腫物に触るような態度をとった。宇三郎と金蔵らとの対立について浦田佑氏は次のように記している。

しかしその宇三郎の帰国したいという潜在意識は、漂民たちのエゴイズムのぶつかり合いによってもろくも破壊されてしまう。(中略)「漂民宇三郎」において、井伏が描いているエゴイズムのぶつかり合いは、「お前はばかだ」「お前はばかだ」と意地を張り合う「山椒魚」の山椒魚と蛙にまつたく重なっているのである。エゴイズムの対立を描くことは井伏文学のライトモチーフだということすでに述べてきたが、「漂民宇三郎」もまたそうしたものの一つに他ならない。帰国できなかつた宇三郎に、井伏の冷徹な人間凝視の目が窺い知られるのである。(注12)

宇三郎をめぐる漂民間の葛藤を浦田佑氏はエゴイズムのぶつかり合いとして見ている。しかし私はその葛藤には、嫉妬やエゴイズムの個人的感情の人間をするどく凝視する井伏の人間観のみならず、それ以上の閉鎖された社会の問題をも語ろうとする姿勢が現れているように思う。これに関わり新しく渡辺善雄氏が、次のように論じている。

異国でのストレスが宇三郎いじめにつながったのだが、宇三郎を当惑させたのは抗議文を書く村の論理ではなかつたか。「お前は傍若無人」で「はたの見る目」を考えない、次郎吉と「同じ在所」の者として抗議する、という。それは保守的閉鎖的で、所属集団からの逸脱を許さない(鎖国体制はその延長。異文化に触れた漂民を、集団を乱す危険人物と見なして拘束する)。宇三郎はそれに馴染めない自分がついた。(注13)

渡辺氏は金蔵らの行動に、「保守的閉鎖的で、所属集団からの逸脱を許さない」側面を見、これが延長して鎖国体制になると言っている。しかし、その対立の延長が鎖国体制であるというよりは、人間の排他的エゴイズムの性質をあおっているのは、社会の側にあるといえよう。個が社会に影響を与える事もあるが、この場合は社会がより強く個に影響して、「保守的閉鎖的集団」の性格は、個のものではなく、共同体のものである。漂民たちは帰郷のために故郷のアイデンティティをひたすら守ろうとし、そのために対立が起きる。鎖国体制が個に影響を与え、金蔵らは保守的集団になり、異文化にバリアを張っていたために宇三郎の恋愛、交友、交流を受け入れず、衝突したのである。井伏が金蔵らの背後にある共同体の閉鎖的メカニズムを批判するため、宇三郎と金蔵らに対立させていると思えるのは、作品がこの対立の話で終らず、続けて二十、二十一章に掛けて、金蔵らが帰国して辛い目に会うアイロニーを描いているからである。次の項でそれを考察する。

四. 閉鎖的権力体制への批判と共同体の相対化

金蔵らは故郷のアイデンティティを必死に守って帰郷したにも関わらず、彼等を待っていたのは予想以上の厳しい取調べであった。天保十四年(一八四三)五月宇三郎を除いた漂民六人はロシア船と別れてフルベツに上陸してから松前藩重役の取調べが始まる。その後エゾ、松前、江戸を経ての五年間の取調べは嘉永元年(一八四八)十月一日

に帰村することによって終る。それは長者丸遭難以来十一カ年を経ての帰村であった。取調べの苛酷さで、八左衛門は「肺癆」を起こし死に、他の漂民も弱音を吐く。

「其方ども本日より旅人宿に預け置く。一步も外に出ること相ならん。また従来の通り、固く口舌を慎しむやうにすることぢや」と厳しく云ひ渡した。(20章 250頁)

つい気持が苛立つて仲間同士の喧嘩がある。血の道を起した女のやうに不貞寝をしたり、めそめそと泣いたりする者がゐる。こんなことなら憂き艱難をして日本に帰るのではなかつたと暴言を吐く者がゐた。(21章 252頁)

四人の者は手錠を仰せつけられ、改めて大黒屋へお預けとなつた。(中略)

「(前略)但、其方ども帰村して後も、親類縁者のほか他家の者に逢ふこと相成らん、村より外に出ること相成らん。異国の事情は、兄弟たりとも口外すること相成らん。この儀は国禁であるによつて、其方どもの村役人も心得てゐるものぢやと思へ。」(21章 257頁)

望郷の念によつて必死で帰った金蔵らは、共同体から冷たく異人扱いされた。過去共同体を絶対化して、宇三郎を異人扱いし加害者であった漂民たちが、今度は帰郷して共同体に排斥される被害者になるアイロニ的悲劇を描く事で、個を左右する閉鎖的権力体制へ焦点が当たり、井伏の一層強い体制批判が浮かび上がってくる。また、社会に影響を受けた金蔵らが、気が付かず小さい閉鎖的村を作つたように、個が社会を規制していく危険性もあるということも井伏は警告している

のであろう。

閉鎖的体制を具現している金蔵らとの対立により、異国に残留するようになる宇三郎の悲しみに加え、帰郷した金蔵らが故郷で異人扱いされるといつた悲しみがある。この二重構造を通して共同体を漂民の帰郷すべき所として絶対化できないことを作品は強調している。即ち、帰国組の漂民が異人扱いされる様子が二十、二十一章にかけて語られている理由は、今まで絶対的であつた共同体を相対化してとらえるためであろう。

それに加え、共同体を相対化しているもう一つのしかけは、井伏が漂流ものとして主人公を異国に残留するように設定している事である。ところが、残留する宇三郎の異国での人生に対する語り手の評価は決して甘くない。

以上、漂民が日本に帰つてからの顛末は、「時規物語」「蕃談」に記されてゐるが、外国に残つた宇三郎の件には少しも触れてない。帰国して目出度し目出度しの者の側に都合のいいやうに記録されてゐて、のけ者にされてゐた宇三郎はすっかり抹殺されてゐる。しかし記録の上で抹殺されたからといって不幸とは云はれない。ただ宇三郎はその後の暮しが倅せでなかつたために哀れであつた。(21章 259頁)

宇三郎は記録に抹殺されたから不幸であつたとは言えないが、必ずしも幸せではなかつたと書いてあつて、その理由については詳しく書かれていない。なぜ異国に残留した宇三郎が幸せでなかつたのであるうか。

渡辺氏は宇三郎がどうして幸せではなかつたかについては論じてい

ない。むしろ宇三郎は「村社会と訣別し」ていて、他の漂民と違っているという。異国に残留していたダーエモンとポメナエという日本漂民と、帰国して嚴重な取調べを受けた漂民とは、「鎖国制度に翻弄された庶民の苛酷な実態」であるという。

異国に残留するとうなるか。ダーエモンはふてぶてしく奔放に生きているかに見える。だが、故郷の親兄弟が役人に虐待されるからと言って、本名も在所も宇三郎には告げない。(中略)

異国に残留しても、意識は日本の鎖国制度に縛られたままなのである。(中略)

残留か帰国か、いずれを選んでも安住の地はない(例外は、村社会と訣別した宇三郎)。「漂民宇三郎」は、そうした漂民のドラマを広く描くことで、鎖国制度に翻弄された庶民の苛酷な実態を活写した。(注14)

「鎖国制度に翻弄された庶民の苛酷な実態」は確かにその通りであるが、宇三郎の場合も、決して村社会から訣別できず、翻弄され続けていたのである。それは人間の本能である帰郷願望はあるものの、閉鎖的故郷が受け入れてくれない事への悲しみからくる不幸であった。

次は宇三郎が残留か帰郷かを決める場面である。カムサツカで次郎吉が酔って越中放生津の里歌を歌い、それを聞く宇三郎は涙ぐむ。

次郎吉はまた「行かうか参らんしようか」をうたひだした。

宇三郎は越中放生津の生れでなくて越後早田浦の生れだが、かうして夜空のもとで次郎吉の胸間声を聞かされると涙が込み上げて来るのを覚えた。(14章 192頁)

残留か帰郷かを決める宇三郎の心情の迷いと揺れには、強い望郷の

念が感じられる。彼は、他の漂民たちと対立してカムサツカに残るはずであったのが、強い望郷の念によりひそかに帰郷のためオホーツカに行く金蔵らの乗っている船に同船する。しかし金蔵の押搦にウワへ島へ行くつもりであると言い張って、セツカに残る。交易番所の上役は宇三郎一人残留するのが日本漂民送還の儀にそぐわないといい、次のように宇三郎に語る。

「(前略) そなたが何としても日本へ入国せぬ決意なら、蝦夷の島に下船のとき、病軀のため身が起せぬものとして船底に居残るがよい。瀕死のていにするがよい。これ即ち、便法といふものぢや。その代りに、後は流浪の身の上となるや知れぬものと思へ。」

(19章 235頁)

宇三郎は自分の意志で異国に残る決心はしたものの、「流浪の身」となり、帰郷できない幽閉された身となる。残留後の異国での生活があまり書かれていないのは、残念であるが、冒頭の概略には、宇三郎が異国で生活している途中書置だけ残して、南北戦争の時、一と稼ぎのために家出をした事もあると書かれている。時計修繕工として一人前になった宇三郎が、ただお金だけで家出をしたとは思えず、「流浪の身」の境遇から家出したと思われる。

残留しての異国での生活が詳しく書かれていないのが、失敗であったとは必ずしも言えない。「ただ宇三郎はその後の暮しが倅せでなかつたために哀れであった。」というこの一文から、閉鎖的な故郷は交流を大事にする独特のアイデンティティを受け入れず、永遠に帰郷できない被害者とさせていることが十分感じ取れるからである。残留しての生活が幸せであったとすれば、被害者としての宇三郎のイメージ

は薄れてくるのである。

井伏は残留する宇三郎を描いて、それまで絶対的にしてきた共同体を相対化する試みをし、またこの宇三郎の不幸を通し、閉鎖的権力体制への更なる強い批判をしているのである。井伏自身の失敗作としての評価は、宇三郎の異国での生活を描けなかったからと言うよりは、口癖のような謙遜と思われる。

おわりに

以上、「漂民宇三郎」の虚構部分を中心に考察を進めてきた。宇三郎をめぐる虚構が作品の中で果している重要な位置と役割を見る時、作家の閉鎖的共同体に対する批判的まなざしが明らかになる。

まず、宇三郎と他の漂民たちとの衝突は作品を貫く大きな主題だが、そもその原因は、宇三郎の自らの出自の共同体の価値観にとらわれない自由な発想と行動に、故郷の閉鎖的アイデンティティを死守しようとする金蔵らが激しく反発したことによる。ここでは個を左右する背後の社会のメカニズムが語られているのである。自らの属した共同体の閉鎖的価値観を固守しようとする金蔵たちが、それからはずれる宇三郎を異人扱いするのはいわば当然の成行きであろう。

ところが、閉鎖的アイデンティティを固守して帰郷した金蔵らが今度は、予想を上回る厳しい取り調べをうけ、故郷から異人扱いされる憂き目にあう。宇三郎を仲間はずれにしながら、共同体の価値観を絶対化して帰郷した彼等の故郷での不幸、このアイロニーは共同体を絶

対化する思考の愚かさをも物語っている。金蔵らは閉鎖的体制の具現として加害者であったのが、今度は体制に翻弄されるという体制の被害者になることにより、個が体制に支配されている側面が見える。

視点を移動して、金蔵らが帰郷して故郷で異人扱いされる様子を描いている終結部は、閉鎖的権力体制を浮き彫りにし、批判するためであった。しかし中心はあくまで主人公宇三郎の物語にあつて、語り手は主人公に重なりつつ、終りの所で更に重要なメッセージを語っている。宇三郎の初め扱いを通しての交流の精神と、残留した宇三郎の帰郷願望により宇三郎が必ずしも幸せでない末尾を通して閉鎖的権力体制を批判している。

「漂民宇三郎」は、今までの漂流もの「ジョン万次郎漂流記」の冒險的な話から変化して、帰国した漂民の不幸と、異国に残る宇三郎の不幸の物語とを通して、絶対的であった共同体を相対化し、閉鎖的権力体制のメカニズムへの批判と、交流という理想を示している。

〔注〕

(1) 昭和三十一年四月に、大日本雄弁会講談社により刊行。

(2) 三浦哲郎「好悪をこえるもの」(『井伏鱒二「漂民宇三郎」』平成十・四、講談社文芸文庫)

(3) 新潮社から昭和六十年十二月から昭和六十一年一月に掛けて出版、補巻まで十三巻。

(4) 井伏の漂流譚の定義は変化している。まず「ジョン万次郎漂流記」の序文での漂流譚の定義を察する。

「漂流譚といふものは、たいていめでたしめでたしで終わる。なぜかといふに漂流して無事に帰つて来なくては、漂流譚は成立しないからである。この物語もその通りめでたしめでたしで終わつてゐる。読みものとして最後が物足りないやうにさへ思はれる。しかしこれが漂流譚の慣はしと見ていただきたい。」(井伏鱒二「序」『ジョン万次郎漂流記』、『井伏鱒二全集』第六卷、平成九・六、筑摩書房)

井伏は漂流譚を無事に帰国した物語として、無事帰国して出世した万次郎を描いた。が、後の「漂民宇三郎」では、漂民に対する関心が違つてゐる。

「何千人という漂流民がいて、生きて帰ってくるのは、ほんとうに目出度しめでたしだね。あまり無かつたんだ。船のなかで死んだり、島に流れてその先住民と一緒になったり、そんな人ばかりだね。アメリカで捕鯨船が盛んになつてから、日本の漂流船が、月に一つくらい着いているんだって……。アメリカに月に一つくらい日本の船が漂流してきたつて。そのうちの何分の一くらいしか生きて帰国していかないそうだ。」(萩原得司『井伏鱒二聞き書き』平成六・四、青弓社)

「漂民宇三郎」では帰れなかつた宇三郎が主人公となり、以前の「漂流譚」の定義と異なつて、「漂流譚」の領域が拡大している。井伏は「漂民宇三郎」で漂流ものとして新しい方向を打ち出している。

(5) 江後寛士(「庶民文学の方法について」昭和四十七・九、『近代文学試論』十号)氏は、「漂民宇三郎」と典拠との関係につい

て初めて本格的に取り組んでいる。が、「異国物語」を實際の文献として考え、必見すべきなのに入手できなかったと記している。しかしその後、涌田佑氏は池田皓氏の次のような言葉を引き「異国物語」が創作であることを明らかにする。

「『漂民宇三郎』を語る池田皓氏―私が井伏さんにお貸ししたのは、「時規物語」「蕃談」「漂民聞書」の三書なんですよ。(中略)「異国物語」と宇三郎には、私も最初はだまされましたよ。本当にそんな文献があるのですか、とお聞きすると、井伏さんは、いやあ、とか何とか言われましてね。でも井伏さんの頭の中では、あの架空の文献がゆるぎなく組立てられていたんですね、それで「漂民宇三郎」の構成が出来てきたんだと思います。」

(「時規物語」「蕃談」を通してみた「漂民宇三郎」)『私注・井伏鱒二』昭和五十六・一、明治書院)

(6) この架空の書物『異国物語』の筆者「素老」とは、井伏鱒二の父、井伏郁太の雅号でもある。(中略)だが、その父が「蚊生」「蚊子」「素老」の雅号を持っていて、大塩中斎の流れを汲む阪谷朗廬が設立した郷学興譲館に学び、中央の野口寧斎なども親交のあつた漢詩人であつたことなどが、最近、寺横武夫の『井伏素老の漢詩文』(昭和60・4、「国文学解釈と鑑賞」)で判明した。その中で寺横武夫は素老道人の漢詩なども紹介しているし、「漂民宇三郎」中の(素老生)として亡父の想いを書きつけていることまで言及している。

これだけ物的証拠が揃えば、『異国物語』は架空の書物ということになる。しかし架空の書物まで作つて作者は実在しない

人物・宇三郎を造型しようとした。」(松本鶴雄『増補井伏鱒二
―日常のモティーフ』平成四・十一、沖積舎)

(7) 萩原得司「漂民宇三郎」(『井伏鱒二聞き書き』平成六・四、青
弓社)

(8) 前掲(6)論文

江後氏は「異国物語」が実際の文献であると思っていたので、
宇三郎の創出を江後氏が先刻承知している筈であるという松本
氏の指摘は間違っている。

(9) 浦田佑『時規物語』『蕃談』を通してみた『漂民宇三郎』(『私
注・井伏鱒二』昭和五十六・一、明治書院)

(10) 「漂民宇三郎」の後半は、帰国後の金蔵らの話へ視点を移動し
ている。これに関連して十重田裕一氏は次のように論じている。

「いま述べたことからわかるように、「漂民宇三郎」では、
異国人ばかりが「異人」として語られているのではなく、宇三
郎たち漂民たちも「異人」とあるという相対化の視点のもとに
語られているのだが、それはおそらく、帰国しなかった漂民(宇
三郎)の「物語」が絶対化されることなく、帰国した漂民たち
の「物語」によって相対化されながら語られるという、前に述
べた「漂民宇三郎」の特色とも呼応しているのだ。」(「異人た
ちの声」平成六・六、『国文学解釈と鑑賞』)

十重田氏は終結部の帰国組の物語の構成の意味は、日本に帰
国した漂民たちも「異人」とならなければならなかったので、
そのことにより、物語が相対化されていると論じている。が、
残留する宇三郎を中心として交流という更なる物語があるよう

に思われる。

(11) 渡辺善雄氏は「漂民宇三郎」を「異文化交流の物語」であると
論じている。

『漂民宇三郎』は異文化交流の物語でもあり、漂民と関わ
る異国の人々も個性豊かに描かれている。(中略)カムチャツ
カでは、日本語の分かるロストフが親切にしてくれた。ロシア
人との交歓のため、忠臣蔵を演じるように指導する。宇三郎が
帰国しないと決意したのも、ロストフに相談してからである。

(中略)ほとんどの外国人は漂民をヒューマンに受入れ、寛容
である。宇三郎を排斥する狭量な仲間や、漂民を抑圧する日本
の役人たちとは対照的である。宇三郎は仲間との対立を通して、
その背後の息苦しい日本の村社会を認識していく。」(「漂民宇
三郎」ノート(上)(下)』平成十二・八、九、『月刊国語教育』)
また氏は二粒の初め役割については「宇三郎の生きる力」と
なって「主人公たらしめている」と記している。

「生か死かという切迫した状況の中で得た二粒の初。これを
育てよう。その思いが宇三郎の生きる力となり、後に愛蓮(オ
イレン)と結ばれてハワイで稲を栽培することにつながる。宇
三郎を主人公たらしめているのは、初への執着であろう。(中
略)

異国の地にたくましく根づいた二粒の初。宇三郎の小さな望
みが広東人に助けられて実現した。芽生えは、原爆を描いた『黒
い雨』(一九六六)末尾の稚魚の群れを連想させる。」

氏はロストフの事や忠臣蔵の事を通し、「異文化交流の物語」

であると述べてはいるものの、交流を初には関連づけてない。

(12) 前掲(9) 論文

(13) 前掲(11) 論文

(14) 前掲(11) 論文

〔付記〕 本文の引用は『井伏鱒二全集』十七卷(平成九・十、筑摩

書房)により、傍線、傍点は私に付した。

(ちよん ぼひよん)